

2025 年の処暑(しよしよ)は 8 月 23 日です。

次の節気である白露前日までの期間 8/23～9/6 を指す場合もあります。

処暑の「処」は落ち着くという意味で厳しい残暑もいよいよ和らぎ、時折吹いてくる心地よい夜風を感じ次第に長くなる夜を楽しみながら秋の到来を待つ頃のはずですが、地球温暖化が叫ばれる昨今、年々夏の暑さが増しているような気がします。

「秋暑」といって暑さがぶり返し、夏の疲れが出やすくなるのもこの時期です。

夏を惜しみながらも、秋への準備を始める目安の候です。

また、穀物が実り始め、収穫までもう一息というところです。



この時期は秋の台風が訪れることが多く、暦のうえで、「三厄日」と呼ばれる日があります。

「八朔」「二百十日」「二百二十日」がそれにあたり、古より暴風雨がやってきて稲作に被害をあたえる要注意の日とされてきました。

「厄日」は秋の季語にもなっており縁起の悪い日とされてきました。

二百十日が暦に記載されるようになったのは江戸時代の初期以後のことで農家に注意を促すことが目的であったそうです。

立春から数えて二百十日は例年、9 月 1 日前後になります。

台風が襲来する日と丁度、稲が開花する時期とが重なるため、昔から農家の厄日とされ、二百十日や二百二十日の頃には、風の神を鎮めるために「風祭(かざまつり)」という行事が行われてきました。



京都・松尾大社の「八朔祭」、山形の「大谷風神祭」などがあります。

地方によっては、風祭を「風鎮祭(ふうちんさい)」や「とうせんぼう」などと呼ぶことも。

2025 年は、八朔(旧暦 8 月 1 日)が 9 月 7 日、二百十日は 8 月 31 日、二百二十日は 9 月 10 日となっています。

芙蓉の花は、7 月から 10 月にかけて開花し、処暑の頃に見頃を迎える花の一つです。

特に、朝に白く咲き、夕方に赤くなる「酔芙蓉」は、処暑の時期に楽しむことができる花として知られています。



<処暑の時期の有名な一句>

砂の如き 雲流れゆく 朝の秋 正岡子規

<句意>

日常の朝の風景の中、ふと見上げると砂の如き雲が浮かんでいます。

それを見て、「ああ、秋なのだなあ」としみじみと秋を実感していることが伝わってきます。

見たままの情景を言葉で巧みに表現している一句。